乳房失いて――見つからなかった乳癌

姫山さち

二十一年まえの、十一月末の晴れた日の朝だった。

その時私は四十四才、午前九時二十分に乳癌検診の行われる地区の公民館へと、歩を進めた。

夫は隣の市の職場に出勤、長男は東京の芸大を目指す受験生、長女は中学三年の受験生だった。

私は十七歳の頃から、足裏に水泡ができて赤く腫れあがり、様々な治療をしたが、悪化の一途をたどった経験がある。二〇歳を過ぎ、印刷所に就職した頃になっても治ることはなかった。

病名が分かったのは、仕事を休んで入院した実家近くの医大付属病院でのことだった。診断は、掌蹠膿胞症（しょうせきのうほうしょう）。最初は足裏だけだった症状は、この頃には全身に及んでいた。痛痒く睡眠がとれず顔にも症状が出ていた。

若い私には顔に病痕が残るのが一番の苦痛だった。このままの状態では恋もすることができない。そんな想いと病苦の辛さに希望が全くもてぬ日々だった。

しかし、病痕は残らずに済んだ。薬の服用と塗り薬はかかせなかったが、入院の一年後には退院をすることができた。二十三才になっていた。結婚にも支障はないと言われた。

その後、印刷所でもう一年働き、二十五歳で結婚。出逢いは見合いだったが、恋愛と同じようなものだった。

夫は長男出産後の私の健康状態に、長女を生むか生まないかは私の意志に任せる、子は一人でも良いといってくれたが、私は、一人子は自己本位になり易いと聞いていたので産むことにした。が、それよりは年を重ねた私達を思い産んだのかも知れない。健康な母を持つお子に比べれば、子供達に苦労をさせたかも知れないと懺悔に満ちる。

長女出産後に、治まっていた掌蹠膿胞症が再び悪化をしてしまった。それか

らは更なる悪戦苦闘の連続……。理解を示してくれる方もあるが、回りの方の無理解に苦しんだ。怠惰と思われた。若いだけで苦しみが増すことがあるのを知った。

その時から里より遠くに縁づいた私は、ほぼ一人で病気と闘いながら育児に家事、数々の病院、漢方、針、整体への通院が再び始まった。そして自律神経失調症の併発、体調が悪く眠られぬ日々が続き検査を幾度したことだろう。長男出産の二年後に中小企業の役員をしていた某社から、転職をして役職に就いていた夫に理解があったからまだ救われている。

身体の調子が良くないながらも公民館へ着いた。

すでに十人が並んでいた。診察室になっている部屋の前の椅子へ座った。時間が経つのが遅く感じられ、体がとてもだるかったのを覚えている。

……順番がきて私は部屋へ入った。

白いカーテンで仕切った八畳の右手が診察室、私は左手の二つ並んでいる手前の籠へジャンバーを脱いで入れた。そして、セーター、ブラジャーを入れ、下着で乳房をかくして名前を呼ばれたので、カーテンを開けて診察室に入っていった。

奥に三十半ばの男の医師が座っていた。慣れた手つきで医師の指が、左のリンバから乳房全体を押し乳頭の回りを押して行った。

そして、右のリンバから乳房全体に乳頭の回りを押し、元にひとつ戻った瞬間、ピタリと医師の指が止まった。

「大きな病院にいったほうが良いですね。隣に保健師がいますから、これを持って行ってください」

医師の声は冷静だった。

（えぇ、嘘！　嘘！　……）私の心臓は早鐘のごとく鳴りつづけ止まらなかった。サッと血の毛が引いた。

「これを持って行って下さい」

医師の隣で補助をしている看護師が、同じ言葉を言いながらカルテを渡した。

「はい、有難うございます」

私は辛うじてそれだけを言うと、そそくさと服を纏い部屋を出た。

（とにかく隣に……）それだけを思いながら、まるでふあふあと雲の上を歩いているように思った。足がなかなか前へ進まなかった……。

部屋で待っていた保健師は慣れたもの、椅子に座るように促した。彼女は私の問いに、近隣のK市の国立癌センターを薦めた。

翌々日の朝、午前六時二十分に夫の運転する車で癌センターへと走った。

車窓より観える風景にまったく色がなく音がしなかった。ただ、風景が過ぎ去って行くのみ……私の深層心理を表現しているようだった。不安と恐れが渦巻いた。

彼は、押し黙ったまま運転をしいた。彼の奥底もいかばかりであっただろう。まだまだ子供達に教育費もいる。

夫は余程のことがなければ仕事を休まない。私も望まない。私を癌センターの玄関に降ろすや彼は勤務先へ向った。

「有難う！」

私はこう言って車を降りた。

そして玄関へ……ドアをあけると広いホール、目の前の幾つもの長椅子が目に入った。その向こうはさほど広くない中庭、梅の木が観えた。まだ閑散としている。柱時計の針は午前7時を指していた。

受付を探した。まだ白いカーテンが閉まったまま、受付のカウンターの箱に保険書を入れて長椅子へ座った。

受付は8時半から。私は石川啄木の一握の砂の文庫本を広げた。この本は若い頃からの愛読書だ。啄木の歌に本当に励まされた。

啄木との出遭いは小学校の授業……通院に良く携えた本だ。しかし、目では歌を追ってはいるが、心は上の空……。

私の前に二人の患者さんがおられたので、受付が終わったのは八時五十分、すぐに乳腺科へ向った。

乳腺科の前の長椅子には多くの患者さん、少し安堵……乳腺科の受付の箱に診察券を入れて端の長椅子へ座った。

その日は掌蹠膿胞症の治療中に知り合った友が、忙しいなか付き添ってくれることになっていた。

彼女は九時半にやってきた。二人の子供さんがいる。有難いと思った。

診察は十一時半だった。その前に血液検査とマーモの検査をしている。
「癌ではないようですよ！　癌では！」
小太りの三十後半の男の医師が、マーモの映像を見ながらいった。
（ええ、本当！　本当！　……）私の心臓は嬉しさで高鳴った。とくとくと聴こえてくる。
「午後からエコーの検査をします！」
医師の言葉だった。当時は癌センターでも、エコーが一台のみなのである。

癌センター内の食堂で友と昼食をすませた。エコーは午後、三時過ぎ、結果は六ヶ月後の再診だった。
その時の私の歓びは言いつくせない。心の底から安堵と歓びが湧きあがってくるのを抑えることができなかった。待合室で待つ友に報告をしながら、思わず涙が溢れた。昨日のように鮮明である。
が、しかし、約一カ月後の正月明けに妙な不安と違和感に襲われ、癌センターの再診を受けた。診断は入院の手続きをして帰宅せよとのこと、副部長は癌だと宣告なされた。

入院をした私は、医師より一週間は検査、そして悪性ならば摘出手術を受けて、その後三週間の入院になるとの説明を受けた。
悪性か良性かは患部を開らき、組織検査に出さねば分からぬとのこと。だから悪性の場合は直ちに手術ができるように、あらかじめ全身麻酔を行い患部を開くのだとのことだった。
わたしが覚醒したのは、一般室ではなく回復室だった。
私は、癌と悟った。
手術は右乳房、リンパ、筋肉の全摘、胸の肋骨がくっきりと奔っている。
今もその部を見ることができない……。
夫が予備校に通学している長男と、受験のために手術を延ばしたので、高校に進学していた長女を伴って回復室にやってきたのは、手術の翌日だったように記憶している。
回復室は一週間の入室。回復室では、彼の兄夫婦と私の実姉ふたりと友人の

見舞いをいただいた。有難いと思った。

夫と娘は私の退院までの四週間を、家事を分担して乗り切っていた。

帰郷した長男に母が乳癌だと告げると、サッと顔色が変わったとしばらくして長男の様子を聞いた私に、夫は言った。

娘には癌とは告げず、「ちょっと、入院をしてくるから、少し長くなるかもしれないけど、すぐに帰るよ」と私は伝えていたのだが、娘は後日、うすうす分かっていたと告げた。

リハビリは辛いものだった。自宅でも続いた。唸り声混じりだった。

左半身の関節痛の後遺症が残り、足首が急に痛みだし時には突然に歩行ができなくなるほど、薬は五年、十七年通院をした。

還暦過ぎのある朝、頭痛と首に痛みが起こり口が開かず歩けなくなった。直ちに私は脳神経科に駆け込んだ。

診断は加齢による頸椎の湾曲、処方は上半身のストレッチと二種類の薬だった。

私は毎日三回の三日のストレッチをした。驚いたことにたった三日で痛みが軽くなった。

そのとき私はハタと気がついた。

ぜったいに、バレエが良い。全身運動……。その日から薬を止めて一応バレエの心得があるので、バレエを応用して全身のストレッチを初めた。

現在とても快調……ストレッチのボランティアをやらせて頂きたいくらい。

私は生かされた。

わずかでも社会に貢献できたらこの上ない歓び……。

明日を向いて歩いて行こうと思う。